

科目名 Course Name		開講年次	開講学期	曜日・時限
英語学 English Linguistics		2年	前期	別途、時間割参照
単位数	授業の形態	授業の性格		履修上の制限
2単位	講義	選択 (教職課程必修)		特になし
当該科目の理解を促すために受講しておくことが望まれる科目				
特になし				
同時に履修しておくことが望まれる科目				
特になし				
担当者に関する情報				
氏名	研究室の場所	オフィスアワー	電話番号・メールアドレス	
谷村 航	非常勤講師室	金曜日のお昼休み時 (12:10 - 12:40)	授業中に指示します	
授業の概要				
英語とはどのような言語なのか。その概要を音、形式、意味、機能、言語使用、歴史の観点から考察していく。また、英語の教職課程の必修科目として、英語を教える際に必要な英語の言語的な特徴を学習する。英語を教えるには、英語を単に使えるだけでは不十分であり、英語とはどのような言語であるかに関する知識が求められる。この講義を通して、英語という言語の特徴を学び、教える際に必要となる知識の習得を目指す。				
授業の目標				
①英語という言語の特徴に関する概略的な知識を習得することができるようにする。 ②英語の教員として必要となる英語の言語的特徴を習得することができるようにする。 ③英語と日本語を比較・対照することにより、両言語の特徴を対照言語学的視点で考察できるようにする。 ④英語と日本語を比較・対照することにより、母語である日本語に対して言語直観を働かせられるので、ことばに対して興味、関心を抱くことができる。そのことによって、さらにはことばに対して鋭く観察できるようにする。				
授業の方法				
基本的には講義形式で授業を行なうが、受講者には予めテキストを読み、内容および自分の考えをまとめてくることが求められる。				
学習の成果 (学習成果)				
①学生は、英語の言語的特徴を、音、形式、意味、機能、言語使用、歴史の観点から考察することができる。 ②学生は、将来英語教員として必要となる英語の言語的特徴を学んで、生徒に説明することができる。 ③学生は、日本語と英語を比較、対照することにより、日本語に対する言語直観を使い、言語を分析する面白さを体験し、ことばに対する鋭い観察をすることができる。				
授業のスケジュールと内容				
第1回目	ガイダンス：授業の進め方・発表者分担・英語学の各分野の概観			
第2回目	音声学・音韻論：発話のメカニズム、音素と異音、音節			
第3回目	音声学・音韻論：語アクセント、イントネーションとリズム			
第4回目	形態論とレキシコン：形態論の仕事、語の特徴、形態素分析			
第5回目	形態論とレキシコン：語形成過程の種類			
第6回目	統語論（生成文法）：句構造、格と意味役割、移動			

第7回目	統語論（機能主義）：文の情報構造、関係節、代名詞照応
第8回目	統語論（機能主義）：省略、視点、数量詞の作用域
第9回目	意味論：分野と立場、さまざまな意味関係
第10回目	意味論：形式意味論のアプローチ、認知意味論のアプローチ
第11回目	語用論：文脈における言語の使用、グライスの会話の協調原理、ポライトネス
第12回目	語用論：発話行為、間接発話行為、命令文・依頼表現の日英対照
第13回目	英語史：古英語、中英語
第14回目	英語史：近代英語
第15回目	英語史：世界の英語、まとめ

成績評価の方法と基準

評価の領域	割合	評価の基準
授業参加態度	15%	①準備学習（予習、復習）ができている。 ②授業および教科書の内容に対して自分の意見を持って、さらには積極的に発表する。 上記①～②を評価の基準とする。
レポート	50%	授業で学んだことを過不足なく記述でき、更にそれらを踏まえて自ら問題や課題を設定し、それに対する自分の意見を述べる事ができる、以上を評価の基準とします。
調査報告書		
小テスト	20%	復習を兼ねて、毎回1つの学習事項が終わるごとに小テストを実施する。
試験		
発表内容（態度含む）	15%	①内容（教科書の内容を過不足なく発表できる） ②採究（教科書の内容に対して独自の意見や問題を設定できる） ③発表（内容を効果的に発表できる）以上 ①～③に基づいて評価する。
その他		

教科書と参考図書

西光義弘（編）（1999）『日英語対照による英語学概論（増補版）』くろしお出版

履修上の留意点・ルール

積極的に授業に参加することが望まれる。また授業で理解できないことやその他不明な点は必ず質問すること。
--